

## 数学

### ◆大設問ごとの内容と結果◆

大設問	主な出題内容	設問数	配点	受検者平均点	受検者得点率(%)
問 1	基本的な計算問題	5	15	14.14	94.24
問 2	標準的な計算問題、2次関数、方程式、平方根、回転体の体積	6	24	16.96	70.68
問 3	平面図形、データの活用、方程式の文章題	6	25	6.79	27.16
問 4	関数に関する問題	3	15	6.82	45.49
問 5	確率に関する問題	2	11	3.98	36.18
問 6	空間図形に関する問題	2	10	2.73	27.28
		24	100	51.42	—

(「令和7年度神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査の結果」より作成)

(参考：合格者平均点51.3)

### ◆概要◆

大設問の構成は例年通りの6題でした。小設問数(採点単位)は問3(イ)のデータの活用に関する出題が1題減少したことで24題となりました。また、同じく問3の方程式の文章題では、昨年度は解だけを選ぶ形式でしたが、今年度は式と解の両方を選ぶ完答形式に変化しています。

分野ごとの配点を見ると、データの活用に関する出題が1点減少し、確率に関する出題が1点増加していますが、計算や関数、図形については昨年度と同様のバランスで配点されています。解答形式は2022年度以来、すべてマークシートによる解答形式となっており、数字選択も6題で変わりません。

平均正答率が9割を超える問題数が近年で最も多かった一方、平均正答率が3割を下回った問題数もここ数年で最も多かったです。難問が増えたことで、得点が70点を超えた受験生の割合は昨年度と比べて半減し、解答形式が変化していない2022年度以来、最も低い平均点となりました。

### ◆大設問ごとの出題傾向と難度◆

問1：例年通りの基本的な計算問題です。出題内容は一昨年度とほぼ同内容でした。この数年では珍しく、すべての設問で正答率が9割を超えました。受験生にとって、貴重な得点源となる大設問でした。

問2：(ウ)の関数に関する一行問題が、昨年度の変域に関する出題から、今年度は変化の割合に関する出題になり、大幅に正答率が上昇しました。一方で(エ)と(カ)の2題は正答率が5割を下回り、大問全体としての正答率は低下しました。(エ)割合に関する方程式の出題で、苦手とする受験生が多い単元でした。(オ)昨年度と同様に空間図形の体積を求める問題でしたが、求める立体が回転体である点、相似な図形の考え方をいなければならぬ点が、多くの受験生を苦しめました。

問3：(ア)(ii)例年のような求角の問題ではなく、相似な図形の線分の比や三平方の定理など様々な知識を用いて三角形の面積を求める問題でした。正答率はわずか0.4%で、近年でも類を見ない難問でした。(イ)のデータの活用は、箱ひげ図のしくみを根本的に理解した上で、長い会話文から複雑な条件を整理して答えを導く問題となっており、これも受験生を苦しめました。

問4：2013年度以来、久しぶりに反比例のグラフが出題されました。分数の計算が多く、手間取った受験生が多かったでしょう。(ウ)は底辺が等しい三角形において、面積の比=高さの比であることに気づくと素早く解けたようです。

問5：例年通り2つのさいころの出目の数を考える問題でしたが、単純な操作をおこなうだけでなく、多少の計算を必要とする問題でした。正確で素早い作業力が明暗を分けた問題でした。(イ)の正答率は昨年度のおよそ半分まで低下しています。

問6：昨年度は展開図を組み立てる問題でしたが、今年度は予め見取り図が提示されていたことで、(ア)の正答率が10%程度上昇しています。一方で(イ)は空間内の2点間の距離についての出題でした。垂線がそれを含む立体の高さであることに気づくことが、スピーディーに答えまでたどり着く近道でした。例年と同様、正答率が5%を下回る難問でした。